

『太平記』・『三国志演義』・"Le Morte d'Arthur"

における語り手のスタンス

——話者評による時空間の移動と詩の機能——

田中尚子

はじめに

戦い・合戦という歴史的事実を歴史書としてではなく、文学の形で書き留める——、古くから世界各国で行われてきたことである。筆者はそのような行為に至った人々の普遍的思考の解明を最終的なテーマに据えつつ、当面の課題として軍記と『三国志演義』（以下、『演義』）との比較検討に取り組み、その成果を以て軍記というジャンルの特性やその時代的変遷の様を明らかにしてきた。^①そして、ここで次の段階に進む上での問題が生じる。すなわち、アジア以外のテクストに目を向けていった場合に、自身のこれまでの研究成果がどのような位置付けとなるのかという問題である。

歴史的事実を文学としてまとめる志向は言うまでもなく、琵琶法師や講談といった口承による流布、数多く伝えられる諸本の存在など、軍記と『演義』の大枠での共通性は概ねヨーロッパ叙事詩にも当てはまり、そういう意味ではヨーロッパ叙事詩を両作品と同レベルに並べて比較検討するのもあながち的外れなことでもなく、それどころか日中

間の比較では見出し得なかつた個々の作品の特性を浮き彫りにできるのではないかと思われる。そのような思いから、『演義』の関羽、『太平記』の新田義興の怨霊譚とそれに纏わる聖地（玉泉寺・新田神社）との相互依存関係について論じた際に、試みにアーサー王伝承とグラストンベリ修道院の事例も追加して取り上げてみたところ、結果としては日中との共通性が浮かび上がり、ヨーロッパの作品を考察対象に追加することに対し、一定の妥当性は呈示できたかと思う⁽²⁾。よって、こういった考察の例を増やしていくことで、自身の研究に一層の説得力を持たせることができようし、それがとかく古典文学においては否定されがちな比較文学研究の有効性を訴えていくことにもなると確信する。そこで本稿では、『太平記』、『演義』に併せて、“Le Mort d'Arthur”こと『アーサー王の死』（以下、『王の死』）を取り上げ、三作品における語り手のスタンスについて比較検討していきたい。

一、『太平記』の「今」への意識

『太平記』、『演義』、『王の死』の三作品いずれにおいても、語り手が物語展開上効果的にその姿を表す。すなわち語り手は物語の時空間内ではなく、その時空間の外の世界に身を置き、俯瞰的視点から物語中の出来事や人物の動きを捉え、時にそこに評価や感想を添えて語ることで物語を誘導していくのである。そして、物語の時空間を語り手自身の位置する時空間内に収める入れ子構造が成立することで、作品に奥行なり立体感なりが与えられることとなる。

語り手の存在が強く感じられる箇所といえは、『演義』における各章回の結びがまず思い浮かぶ。第一回「宴桃園豪傑三結義 斬黃巾英雄首立功」を見てみよう。当該章回では、張飛が今にも董卓を殺さんとしている緊迫の場面を描き、「正是、人情勢利古猶今、誰識英雄是白身、安得快人如翼德、尽誅世上負心人、畢竟董卓性命如何、且聽下文

分解（これぞ、「人情勢利につくは古も今の如し、誰か英雄の白身なるを識らんや。安でか快人翼徳が如きを得て、悉く世上負心の人を誅せん。」と申すところ。はたして董卓の命は如何になりましたか。それは次回に解き明かすのをお聞き下さい^③）と結ぶ。話の結末を次回へ持ち越すクリフハンガー方式で、緊迫感を高めるのはもちろん、物語の流れを俯瞰的に捉え直す目的も伴っていたと考えられるが、その捉え直しを通して、人の日和見主義が古今変わるものではないという主張（傍線部）を、「今」を生きる享受者にとつても他人事ではない問題として意識させていくことになる。

このような「古今」の枠組みによる語りは、『太平記』、『王の死』でも効果的に用いられる。否、むしろこの二作品の方がより積極的にその枠組みを利用しており、それが『演義』の志向性との違いを生むこととなるのだが、そのことを明らかにするためにも、まずは『太平記』の事例から確認していききたい。

承久ヨリ以来、平氏世ヲ執テ九代、曆数已ニ百六十余年ニ及ヌレバ、（中略）同時ニ軍起テ、纔ニ四十三日ノ中ニ皆滅ビヌル業報ノ程コソ不思議ナレ。愚哉関東ノ勇士、久天下ヲ保テ、威ヲ遍海内ニ覆シカドモ、国ヲ治ル心無リシカバ、堅甲利兵、徒ニ梃楚ノ為ニ被レ摧テ、滅亡ヲ瞬目ノ中ニ得タル事、驕レル者ハ失シ儉ナル者ハ存ス。古ハヨリ今ニ至マデ是アリ。此裏ニ向テ頭ヲ回ス人、天道ハ盈テルヲ欠事ヲ不知シテ、猶人ノ欲心ノ厭コトナキニ溺ル。豈不^レ迷乎。

（卷十一「金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事」^④）

多くの章段を費やして述べてきた北条氏滅亡までの過程をもう一度簡略に説明し直した（本文中略部分に相当）上で、盤石だと思われていた彼らの支配体制が僅か四十三日で滅びることとなったのは、ひとえに彼らが為政者としての資質を欠き、しかるべき統治をなし得なかった「業報」による、との語り手の評が呈される。さらに続けて、古から今に至るまで驕れる者が亡び、質実なる者が永らえる例はあるのだとして、「今」を視野に入れた物言いがなされ、

「今」の時代への教訓、警告とするのである。

抑元弘ヨリ以来、忝モ此君ニ憑レ進セテ、忠ヲ致シ功ニホコル者幾千万ゾヤ。然共此乱又出来テ後、仁ヲ知ラヌ者ハ朝恩ヲ捨テ敵ニ属シ、勇ナキ者ハ苟モ死ヲ免レントテ刑戮ニアヒ、智ナキ者ハ時ノ變ヲ弁ゼズシテ道ニ違フ事ノミ有シニ、智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヘヨリ今ニ至ル迄、正成程ノ者ハ未無リツルニ、兄弟共ニ自害シケルコソ、聖主再ビ国ヲ失テ、逆臣横ニ威ヲ振フベキ、其前表ノシルシナレ。

（卷十六「正成兄弟討死事」）

こちらは、作品中一貫して忠義の士として描かれる楠木正成の最期を受けての評である。智仁勇すべてを兼ね備え、正しき道を最期まで全うした彼のような人物は稀であると、これまた「今」という時空間から捉えている。正成という人物を賞賛するための表現ではあるが、彼の死を現体制の瓦解の兆候として位置付けるところには、道を踏み誤った際の危険性を後世に向けて警告する意図を読み取ることができよう。⁽⁵⁾

この警告意識に関連して、ここで『太平記』の話末評について少し確認しておきたい。先の二例の引用もまさにこの範疇にあるが、『太平記』に限らず軍記全般の特徴として話末評が作品の随所に加えられる点が挙げられる。たとえば死者を前にして「哀レ」、「悲シ」と悼んだり、奇瑞や異常現象に対し「不思議」と訝しがったりするなど、軍記の評はある程度似通ったものとなってくるのだが、中でも『太平記』の場合は、「新田・足利一家ノ好ミヲ忘レ恩讐ノ思ヲナシ、互ニ亡サント牙ヲ砥ノ志顯レテ、早天下ノ乱ト成ニケルコソ浅猿ケレ」（卷十四「新田足利確執奏状事」）、「如何ナル世ノ末マデモ、誰カハ傾ケ可レ申ト、群臣イツシカ危ヲ忘レテ、慎ム方ノ無リケル、人ノ心ゾ愚カナル」（卷十五「主上自山門還幸事」）、「我が威勢ノアル時ハ、冥ノ昭覽ヲモ不レ憚、人ノ辛苦ヲモ不レ痛、思様ニ振舞ヌレバ、樂尽テ悲来リ、我ト身ヲ責ル事、哀ニ愚カナル事共也」（卷三十「慧源禅門逝去事」）などの文言に表れる

が如く、国家や人民が遵守すべき行動規範から逸脱することに対する否定的評が頻出するのである。これは過去より学んでほしいとの思いの表れであり、だからこそ語り手が前面に出てダイレクトにそれを訴える機会が増えていくのではないだろうか。そして、それをわかりやすく形にしたものが「古今」に言及する枠組みだったということなのであって、その枠組みは『王の死』でも積極的に利用されることとなる。

二、『王の死』と『太平記』との類似性

『王の死』を本格的に扱うのは筆者にとつて初めてのことであるから、簡単にその書誌情報を確認しておく。⁽⁶⁾一四八五年にイギリス最初の印刷業者ウィリアム・キャクストン (William Caxton) によって刊行された全二十一巻、五〇七章より成る当該テクストは、トーマス・マロリー (Thomas Maleore) が自身に先行するアーサー王伝承や作品をとりまとめたものがその原型となっており、作品の結びには、マロリーの名とともに彼がエドワード四世の治世九年目に書き上げたこと ("For this book was ended the ninth year of the reign of King Edward the Fourth, by Sir Thomas Maleore, knight")⁽⁷⁾などが記される。ちなみにエドワード四世の治世九年目は一四六九年三月四日から一四七〇年三月三日に当たするため、マロリーが当該作品をまとめ上げたわずか十五年後には、キャクストンによって章分け、見出しなど体裁が整えられ、公刊されたことになる。語り手が具体的に示されるのは『太平記』とは異なる点で、それが語り手のスタンスを考える上で問題となってくる可能性も否定できないものの、物語の時空間を包み込む語り手の「今」が意識される点においては、ひとまず大差はない。例を示すに、⁽⁸⁾"For in these dayes it was not the guyse of herenytes as is now a dayes For there were none herenytes in the dayes but that they had ben men of worship and

of prowess / and tho heremytes helde grete household / and refresshyd peple that were in distresse (当時の隠者の習慣は、今とは違っていた。当時の隠者は大抵、隠者になる前には地位の高い武勇の士であった。こういう隠者たちは大世帯を構えていて、困っている人を元氣付けたりしたものであつた) (Book Eighteen, Capitulum xii) ②) といった具合で、*"how a dayes (昨今)"* の隠者が *"in these dayes (当時)"* の隠者の習慣を正しく継承していかないとの物言いには、「今」の隠者を非難し、「古」に倣う重要性を説く意図が込められている。そして、このような「古今」の枠組みを用いて力説するのが、以下の箇所である。

① *Lo ye al englissch men see ye not what a myschvef here was / for he that was the moost kyng and knyght of the world and moost loued the felyschyp of noble kryghtes / and by hym they were al vpholden / Now myght not this englissch men holde them contente wyth hym / Loo thus was the olde custome and vsage of this londe / And also men saye that we of thys londe haue not yet losie ne foryeten that custome & vsage / Alas thys is a grete defaulte of vs englisshe men / For there may no thyng please vs noo terme*

(イギリスの国民よ、ご覧なさい。なんとという情けないことでしょう。世にも優れた王であり騎士であり、気高い騎士の団結をあれほど愛したアーサー王、アーサー王あればこそ、皆が支えられていたというのに、当時のイギリス人はアーサー王に満足することができなかつたのです。この国では昔の風俗習慣もその通りだった。そのくせ、われわれイギリス人は、古い風俗習慣は今まで一度も棄てたり忘れたりしないと云う。ああ、これはわれわれイギリス人の一大欠点である。われわれはつねに何物にも満足しないのだ。)

(Book Twenty One, Capitulum primo)

モルドレッドに謀叛を起こされてアーサーが追い込まれていく展開に対し、語り手はその元凶を「当時のイギリス

人」の変心にあるとするのだが（傍線部②）、そのことを「イギリスの国民」全体に向けて「情けない」ことだと激昂し（傍線部①）、「今まで一度も〜しない」（傍線部③）や「われわれイギリス人」（傍線部④）といった表現を通じて、時空を超越したところでの人間の心の弱さ、すなわち人間の悪しき普遍性を非難するのである。当時の国民が正しく判断できていれば、このような悲劇は起こらなかったはずだとするその背景には、国や民はその本分を全うすべきとの倫理規範が読み取れる。このように語り手目線で国や民にとつてのあるべき姿が示されるわけだが、このあるべき姿の裏に意識されているものは何なのだろうか。それが読み取れる Book Eighteen, Capitulum xxv を引用しよう。

① *now adayes men can not loue seuen ny3te but they must have alle their desyres that loue may not endure by reason / for where they ben soone accorded and hasy hete / soone it keleth / Ryghte soo fareth loue now a dayes / some hote soome cold / this is noo stablyte / but the old loue was not so / men and wymmen coude loue to gyders seuen yeres / and no lycours lustes were bitwene them / and theme was loue trouthe and feythfulnes / and loo in lyke wyfe was vsed loue in kynge Arthurs dayes*

（昨今の人々は、七日も愛すれば欲望を遂げずにはいられない。そういう愛は理性で持続させることができな
い。たちまち意気投合してかっとなえ上がる恋は、また忽ちにして冷えてしまう。昨今の恋もまさにそのとお
り、熱しやすく冷めやすい。安定などあったものではない。ところが昔の恋愛はそうではなかった。男女は七
年間も愛し続け、しかもその間に淫奔な欲望は存在しない。かくてこそ愛とか誠実が存在したのである。アー
サー王時代の一般的の恋愛もまさにそのようなものであった。）

当該章ではそのすべてを費やして、*vertuous loue*（純潔な愛）^②が何たるかを語る。そもそもこの十八巻はラーン
スロットとグウィネヴィア二人の愛が主題となるのだが、この恋愛に関しては決して否定的に描かれはしない。それ

はこの愛が真実の愛だと認められていたからであり、その意識がこの引用部分にも表れている。すなわち、「今」(傍線部①、②)と「古」(傍線部③、④)を用いての対比構造で、昨今の熱しやすく冷めやすい恋愛事情を非難するこの箇所は、裏返せば、そうではなかったこの二人の愛を肯定していることになるのである。戦いの歴史には一見不釣り合いとされそうな恋愛話になぜこれほどにまで拘ったかと言えば、“worshyp in armys may neuer be foyled / but fyrst reserve the honour to god / and secondly the quarel must come of thy lady (武道の誉れをないがしろにすることは許されない。まず神を崇め、しかる後に女性に愛を訴えるのでなければいけない)” (Book Eighteen, Capitulum xxv) といった叙述に明らかのように、王や国家の守護を目的とした騎士道精神においては、恋愛が神への信仰に準ずるものとして位置付けられ、騎士道の本質的な部分と切り離せないものとして見なされていたがためと言えよう。¹⁰⁾ 国家、個々人いずれの立場においても理想的な有り様、そしてその理想の追求のために果たすべき役割が与えられており、それが正しく機能する限りは体制を維持できるという論理展開が当該テキスト内ではなされるようだが、恋愛感情もその秩序のうちに組み込まれていて、だからこそ国家の動乱を描く上でも恋愛に関する叙述を省略できなかったのである。たしかに『太平記』でも女性がクローズアップされ、その女性が世の乱れの契機となる展開がないわけではないものの、¹¹⁾ これほどにまで物語の主軸に据えられることはなく、この辺りはやはり中世騎士物語、ロマンスの特性として認めるべきところだろう。しかしともかくも、「古今」の枠組みを用いて「今」に向けて発信する姿勢は、『太平記』とも共通するもので、両者ともにここを起点に語り手が物語に積極的に介入することとなるのである。が、これらに比して、『演義』における語り手のスタンスは少々異なってくる。

三、『演義』における「後人詩」

『太平記』と『王の死』二作品での物語と語り手による二重の時空間、ならびに語り手の批判意識の強さという共通性を確認してきたが、第一節の段階で予め『演義』がこれらとは若干質を異にすることは示唆しておいた。最終の章回となる第二百十回「薦杜預老将獻新謀 降孫皓三分歸一統」を除くすべての回に置かれるクリフハンガー的^②話末評^③の中では、実は第一節に引用したような「古今」を用いた評はきわめて例外的で、それどころか語り手の主義主張が差し挟まれることはほとんどなく、物語をクライマックスで中断させ、緊張状態のまま次回へと繋げようとする意図の方が優先されている。そういった意味では、これらを「話末評」扱いしてよいのか悩ましいところではあるが、ともかくも、極力表には出ず客観的立場からの語りに専念するのが、『演義』における語り手のスタンスであったとの見方は妥当であろう。

こういった『演義』における語り手の客観性をより強く印象付けるのが、話末評同様作中に頻出する「後人詩」である。

進慌急欲尋出路、宮門尽閉。伏甲齊出、將何進砍為兩段。後人有詩嘆之曰、

漢室傾危天數終、無謀何進作三公。幾番不聽忠臣諫、難免宮中受劍鋒。

（何進は慌てて、逃げ道を探したが、宮殿の門は、残らず閉ざされていた。そこへ、伏せてあった鎧武者が一度に打って出て、何進を真二つに切り捨てた。後の人の詩にこのことを歎じて言うには、

漢室傾き危うく天數終わり、謀無き何進三公となる。幾たびか忠臣の諫めを聴かざりしによって、宮中に劍の矛先を受くるを免れ難し。）
（第三回「議温明董卓叱丁原 餽金珠李肅説呂布」

何進が周りの諫めを聞かずに無防備なまま宮中に入ろうとして斬殺された話を受け、「後人有詩嘆之曰」として後世の人間による批評が詩の形式で示される。「漢室」、「天數」、「忠臣諫」などの語が詠み込まれる点では、先の二作品に見られた批判の方向性とも重なるものの、それを詩の形式で示すという点に関しては、『演義』の特性として注目しておくべきだろう。というのも『演義』では、引用箇所に見られた「後人有詩嘆（歎）之曰」に併せ、「後人有詩讚（贊）之曰」や「後人有詩曰」という形式で、直前の内容をまとめつつそれに対する評を詠する箇所が、それぞれ五十四例、六十二例、四十七例の計一六三例も見られるのである。「嘆」と「讚」という語にどこまで使い分けの意識があるかには検証の余地があるが、ひとまずそこで語られる事件を受けての心情の吐露であることには相違なく、その意味ではこれらも「評」の範疇にあるとして差し支えあるまい。それどころか寧ろ『演義』では、このパターンでしか批評が行われたいとしても過言ではない。しかもここで注目すべきは、物語に反応する主体を語り手ではなく「後人」に設定する点であつて、語り手本人は物語を批評する立場には位置しないのである。

そして、時に後人という抽象的な存在ではなく、実在の詩人が配されることもある。曹操が江南攻撃に向かった場面、「短歌行」が詠まれる直前の箇所を以下に引用しよう。

（曹操）顧謂諸將曰、「吾今年五十四歳矣。如得江南、竊有所喜（中略）吾今新構銅雀台於漳水之上、如得江南、当娶二喬置之台上、以娛暮年、吾願足矣。」言罷大笑。唐人杜牧之有詩曰、

折戟沉沙鉄未消、自将磨洗認前朝。東風不与周郎便、銅雀春深鎖二喬。

（曹操は）大将たちに向かい、「自分は今年五十四歳になるが、江南を切り取つたらば、また幸いなことがある。（中略）この頃漳水の川辺に銅雀台を建てたばかりだが、江南を平定した上は、喬氏の二人の娘を台に待らせて晩年までを心地良く過ごすでしょう。これで望みも叶つたというものだ」と言い終わり、また大笑し

た。唐の杜牧の詩に、「折れたる戟は砂に沈んで鉄いまだ消せず 自ら磨洗をもつて前朝を認む。東風周郎がために便せずんば 銅雀春深くして二番を鎖さん」とあるのはこのことである。）

（第四十八回「宴長江曹操賦詩 鎖戦船北軍用武」）

勝利を確信し、すでにその後へと思いを馳せる曹操の姿を描く直後に、杜牧（八〇三―八五三）の「赤壁」が引用される。古戦場に赴いた杜牧が戟などの遺物を目にしつつ、もし東風が吹いていなければ歴史は変わっていたかもしれない、と歴史浪漫に浸る詠だが、杜牧が赤壁の地を勘違いしていた事実を思うと些か興醒め感は否めないものの、「演義」が杜牧という後世の詩人の目線から赤壁合戦を捉え直そうとしていた意識は確実に読み取れる。「後人詩」同様、この場面でも物語に反応するのは杜牧であり、語り手が批評できる余白は残されていないのである。

ちなみにこの第四十八回以外にも、「後來蘇学士有古風一篇」（第三十四回）、「後杜工部有詩曰」（第八十四回）、「後杜工部有詩歎曰（中略）白樂天又有詩曰（中略）後元微之有贊孔明詩曰」（第一〇四回）、「後杜工部有詩曰（中略）又杜工部詩曰」（第一〇五回）とあるとおり、杜甫（七一二―七七〇）、白居易（七七二―八四六）、元稹（七七九―八三一）といった高名な詩人が登場する。物語の内容を捉え直す役割を、語り手ではなく実在の詩人に委ねることは、後世での当該人物の評価が物語の権威付けとなるとの考えがあったのかもしれないが、実はここには少々問題がある。というのも、第三十四回の蘇学士については、蘇舜欽（一〇〇八―一〇四八）と蘇軾（一〇三六―一一〇一）の二人がその呼称で呼ばれており、しかもテキスト内で紹介される詩が二人の詩作の中に見出せないため、どちらの詠か断言できないとのことであり、第一〇四回に至っては、その訳本において「毛本では次に孔明をたたえた杜甫・白居易・元稹の詩を引くが、すべて疑わしいので、ここには載せない」との注が施されるなど、詩の存在自体が疑問視されるのである。もちろん先の杜牧詩のようにその実在が確かめられる例もあるものの、基本的には由緒あり

げな詩が引かれているように映りさえすれば、物語の格を高めるには十分との思いがあつたように解せられる。

実在の詩人の名前を伴つた場合ですらそのような事情なのだから、「後人詩」の方も「後人」に仮託されたに過ぎず、実際にその詠が存在したかはきわめて疑わしいだろう。つまり、物語に何らかの批評を加えたい場合は、後人の口を通して発信することとし、語り手の役目としてはそれを伝えるのみとされたのだ。もちろん、第一節冒頭に挙げた如き例外もある。しかし全体的な傾向としては、物語と語り手による二重の時空間を用いた『太平記』と『王の死』に対して、『演義』では物語本編・後代の詩人・語り手という三重の時空間にし、語り手と評者との役割を完全に別個のものとしたのである。

四、中国・日本それぞれの志向性

『演義』は、物語に対する批評を「後人詩」に託し、語り手はさらにその外に位置するという構造を選択した。詩という存在に多大なる価値を見出していたということだろうか。この詩の用い方からも、『演義』と『太平記』における語り手のスタンスの違いが見えてくる。『太平記』巻十一「筑紫合戦事」内に、「哀哉、昨日ハ小弐・大友、英時ニ順テ菊池ヲ討、今日ハ又小弐・大友、官軍ニ属シテ英時ヲ討。『行路難、不_レ在_レ山兮、不_レ在_レ水、唯在_二人情反覆之間_一」ト、白居易ガ書タリシ筆ノ跡、今コソ被_二思知_一タレ」という話末評が登場する。一日にして敵味方が入れ替わるその混沌とした様の喩えを白居易の「太行路」の一節に求めたこの部分は、有名な漢詩を使ってその場面を捉え直す意味では、前節での杜牧の例などとも共通するものの、時間軸という観点からすれば、そこには大きな差がある。というのも、赤壁合戦（二〇八）と杜牧の活動時期とでは物語の方が先行し、「赤壁」は赤壁合戦の様を詠ずる

ために生まれたものであるのに対して、元弘三（一二三三）年時の鎮西での合戦と白居易とでは後者が先行し、「太行路」は比喩に適したものと選ばれたにすぎず、『太平記』のこの場面との直接的な関係はない。しかも『太平記』の場合は、『演義』のようにその場面への評価をすべて詩に任せるようなことはせず、語り手の「哀哉」という表現を強調するための詩の引用であり、つまりは語り手の気持ちを代弁する役割を白居易に与えているわけではないのである。

別の角度からも、『演義』と『太平記』の語り手のスタンスの違いを指摘することができる。すなわち、『通俗三国志』の翻訳姿勢である。当該テキストは概ね『演義』の忠実な翻訳と評されるものの、丹念に照らし合わせていくと、軍記——中でも『太平記』——を援用したとおぼしき意図的改変が随所に確認できる。その詳細はつとに拙著にて論じたとおりだが、ここで改めてその一例である『演義』第七十八回「治風疾神医身死 伝遺命奸雄数終」を挙げておく。曹操が見た夢を賈詡が解釈する場面、いわゆる「三馬同槽」である。『演義』が「詡曰、『禄馬吉兆也。禄馬帰於槽、王上何必疑乎。』操因此不疑（賈詡が言うには、「禄馬は吉兆にございます。禄馬が曹氏に帰する験です。王も何を疑う必要がありませんよ」とのことであった。そのため曹操は疑うのを止めた）」と、賈詡の夢占を曹操がそのまま信じたことまで記し、それに対する評をこの後に続く「後人詩」に委ねてしまふのに対して、『通俗三国志』では、「賈詡答へて、馬を夢見るは皆吉兆なり、主上何ぞ、之を疑ひ玉へると云ひければ、曹操これに依て心を安んじ、了に司馬氏の天下となるべきを、知ざりけるこそうたてけれ」と、軍記の話末評にも似た文言が付け加えられるのである。このように改変された背景として、語り手目線で批評が加えられる軍記のスタイルに慣れ親しんでいる日本人の感覚に寄せていく配慮を想定すべきではないだろうか。『演義』が翻訳される過程で軍記に接近していくこの現象も、『演義』における語り手の客観的スタンスの徹底という本稿での指摘の妥当性を裏打ちする事例となろう。

このように、後の時代から物語を捉え直す視点を備えてはいるものの、それが語り手の「今」とイコールにならないのが『演義』なのである。語り手は物語本編の時空間を包む詩人のさらに外の時空間に存在し、自身の主義主張を表に出すことを極力避けたスタンスを取り続ける。それは客観性に基づいた語りというスタイルが重視されていたということである。歴史がテーマとなる作品においては、語り手の主観を大量に挟み込む行為は、その物語内容に対する信憑性の問題が揺らぐ危険性をも孕む。それに対し、文学の形式の一つとして一定の権威を持ったものとされる「詩」を持ち込み、物語を後世の「実在した」人物たちに承認させ、語り手はそれをそのまま語るというスタイルを維持することで、物語内で語られる歴史に正当性を付与し、物語自体の価値を高めていくといった趣向がここにはあったのではないだろうか。それは前稿で論じた、聖地を取り込んで権威付けを図ろうとする姿勢、すなわち、実在する聖地の縁起を取り込むことよって、当該テキストが第三者による認証を受けた正統な物語であることを主張する姿勢とも軌を一にする志向であるように思われる。

そして、こういった三作品における語り手の物語に対するスタンスは、当然のことながら各テキストの序とも対応することとなる。

五、序との対応関係

序とは物語の方向性を示す箇所であるから、物語本編での語り手のスタンスもそこに表れるものと予測される。『太平記』の序から確認していこう。

①「蒙竊採_レ古今之變化_一、察_レ安危之來由_一、覆而無_レ外天之徳也。明君体_レ之保_二国家_一。載而無_レ棄地之道也。良臣

則レ之守^一社稷^一。若夫其德欠則雖^レ有^レ位不^レ持。所謂夏桀走^二南巢^一、殷紂敗^二牧野^一。其道違則雖^レ有^レ威不^レ久。曾聽趙高刑^二咸陽^一、祿山亡^二鳳翔^一。是以前聖慎而得^レ垂^三法於將來^一也。後昆顧而不^レ取^三誠於既往^一乎。

古から今に至る世の移り変わりの中に、平和と乱世との由来を自分なりによくよく考えてみるに、という冒頭の表現(傍線部①)に、「古」から語り手の「今」へと続く流れが強く表れる。しかも、「蒙」という自身の謙称を主語に置くように、語り手自らの目線で歴史を捉え、それに対して意見を述べるという立場を明確に打ち出している。そのようなスタンスで何を述べるかと言えば、「天之徳」、「地之道」の論理に従い、明君と良臣とがそれぞれの立場に相応する行動を取る限りは体制が維持されるはずとの主張なのである。もっともその道を踏み外してしまった過去の事例も少なくはなく、だからこそ後世の我々はそういった歴史を顧みて自身の生き方に生かしていくべきなのだ、と主張は続く(傍線部②)。つまり、このテキストは後世の人間が正しく生きる術を学ぶための教訓の書なのであり、かるが故に、作品中何度もこの語り手が登場し、「今」へ向けて警鐘を鳴らし続けるのである。

語り手のスタンスが『太平記』に近い位置にある『王の死』の場合はどうだろうか。この書にはマロリーの序は存在しないものの、跋文から作品執筆の意図を読み取ることができる。その跋文では彼がこの書を記した時期が明記される(第二節参照)他、"pray for me while I am alive, that God send me good deliverance, and when I am dead, I pray you all pray for my soul. (私が生きております間に、神が私を御救出下さいますよう祈って下さい。また、私が死にましたら、私の魂のために祈って下さい)"と、本人救済の嘆願もなされる。執筆当時獄中にあつた彼にはこの作品の完成が赦免に繋がるとの期待を抱いていたようで、少々感情的にすら感じられるその物語本編の叙述も自身の精神状態が反映されていたが故なのかもしれず、このような語り手の実態が透けて見えてくるところは、ここまで類似してきた『太平記』の語り手の在り方とも異なつてくると評さざるを得ない。ちなみに、マロリーの代わりという思い

があつてか、出版を担当したキャクストンによる序が付されており、そこで当該テクストの方向性が明言される。参考までに彼の序を見ておこう。

And I accordyng to my copye haue doon sette it in emprynt / to the entente that noble men may see and lerne the noble actes of chyalnye / the lenty and vertuous dedes that somme knyghtes vsed in tho dayes al is wryton for our doctryne / and for to beware that we falle not to vyce ne synne / but to lere vsyse and folowe vertu

(私はその写本に基づいて印刷しました目的は、高貴な方々が騎士道の華々しいわざや当時の一部の騎士たちがならいとした君子らしい有徳の行為をお読みになって、学ぶことがおできになるようにということです。(中略) この中に書かれた内容はすべて私どもの教訓のために書かれています。私どもが悪や罪に陥らぬよう、善を行うよう戒めております。)

過去のテクストを読むことが、「今」を生きる我々が正しくあるための教訓となるとの意識が示される。個々人が自身の守るべき道を行くことが騎士道を貫くことに通ずるといふこの感覚に関しては、『太平記』が求める主従関係にも通ずると言えよう。

他方、『演義』では冒頭に「詞」を置いており、やはりここでも詩による粹組み作りが意識される。

詞曰、滾滾長江東逝水、浪花淘尽英雄。是非成败转头空。青山以旧在、幾度夕陽紅。白髮漁樵江渚上、慣看秋月春風。一壺濁酒喜相逢。古今多少事、都付笑談中。

(滾り流るる長江の東に下る水の上、泡沫に浮かびて消ゆる英雄の数。世に栄えしも敗れしも頭をめぐらせば空しくなりぬ。青山は昔のままに、幾たび過ぎし夕陽の紅。白髪翁河の渚に漁りして、秋の月春の風も見すくし慣れつ。一壺の濁れる酒に友を迎え、古今の故事そもいかばかり、みな笑談の種と話しぬ。)

この詩は明の楊慎（二四八八―一五五九）の「二十一史彈詞」を用いているとのことであり、作品の冒頭の時点から第三者の詩を利用しているというのは、語り手が直接の評を発信することはないとの意思表示であったと解釈することもできる。尚、傍線部のように、古今の出来事もすべて笑い話であるなどとの文言も出てくるが、ここに見える「古今」は、これまで論じてきた枠組みとは一線を画すものとして捉えるべきであろう。というのも、ここからは批判精神や教訓性も読み取れず、過去の物語をそれそのものとして味わうことを第一とした発言に他ならない。この、語り手に専念した姿勢は物語本編での在り方と同じである。

このように、『演義』では語り手による批評を持ち込むことなど最初から想定していない。もちろんそれは当該作品に批評精神がなかったという話ではなく、物語と語り手の間に批評担当の詩人を据えたということである。そうすることで、『太平記』や『王の死』よりも入れ子の数が一つ増えることとなるのだから、ある意味、物語の構造の重層化が図られたとすることもできるかもしれない。これもまた、語り手を効果的に機能させる一つの在り方だったのではないだろうか。

おわりに

以上、三テクストにおける語り手のスタンスを、主に話者評、話末評の問題から検討してきた。本稿で注目した点からすれば、『太平記』と『王の死』との共通性と、それらと『演義』との違いが浮かび上がる結果となった。ただしもちろん、それはどちらがいい、悪いという話ではなく、それぞれの特性としてともに認めるべきものであることは言うまでもない。本稿での考察からもわかるように、切り口次第で三者の関係性は変化して映るに相違なく、単純

に日中間の違い、アジア・ヨーロッパ間の違いなどと線引きができるようなものでもない。しかしともかくも、作品単体では見出し得ない特性を、他の国の作品と比べることであぶり出していくことができるのであれば、それはまさしく比較文学研究が効果的に機能しているということになるのではないだろうか。これからも比較文学研究を継続し、その研究手法の有効性を訴えていきたい。

〈注〉

- (1) 『三國志享受史論考』（汲古書院 二〇〇七・一）参照。以下、拙著と称す。
- (2) 『三國志演義』と『太平記』における怨霊と聖地―関羽・新田義興の比較、付・アーサー王伝説との類似性（『中世の軍記物語と歴史叙述』竹林舎 二〇一一・四）。以下、前稿と称す。
- (3) 『演義』本文は毛宗崗本（上海古籍出版社）を使用する。尚、訳は『定訳三國志』（岩波文庫）を参照しつつ、適宜私に改めた。
- (4) 『太平記』本文は日本古典文学大系本（慶長八年古活字本 岩波書店）を使用する。
- (5) 物語中の人物の死を受け、それを「今」への教訓とするのは、小山田高家が主君新田義貞の身代わりに亡くなった際の「自昔至今迄、流石ニ侍タル程ノ者ハ、利ヲモ不_レ思、威ニモ不_レ恐、只依_レ其大将 捨_レ身替_レ命者也。今武將タル人、是ヲ慎_レテ不_レ思_レ之乎」（卷十六「小山田太郎高家刈青麦事」という叙述にも見られる手法である）。
- (6) 以下に記す当該書の概要は、『アーサー王の死』（筑摩書房 一九九八・九）所収の厨川文夫氏の解説による。
- (7) 底本はミシガン大学提供の Corpus of Middle English Prose and Verse (http://quodlibet.umich.edu/cgi/text/text-idx?e=cm_cjdo=Malory/Wks2) を使用するが、跋文の箇所については本文を欠くため、そののみ Electronic Text Center, University of Virginia Library が提供する

Malory, Sir Thomas. *Le Morte Darthur*. Sir Thomas Malory's Book of King Arthur and of his Noble Knights of the Round Table, Volume 2 (<http://web.archive.org/web/20081023031627/http://text.lib.virginia.edu/loc/modeng/public/Mal2Mor.html>) を使用した。

(8) 底本は注(7)に示したとおり。訳に関しては主に『アーサー王の死』(ちくま文庫)を下敷きとしたが、適宜私に改めた箇所がある。

(9) *Yogh* (=U+021D) は3で代用した。

(10) たゞは Book Twenty, Capitulum primum に *"In May whan euery lusty herte florysseth and burgeeth / For as the season is lusty to beholde and comfortable / Soo man and woman reioycen and gladen of somer comynge with hys fresshe floures / for wynter with his rou3 wyndes and blastes causeth a lusty man and woman to coure / and syte fast by the fyre / So in this season as in the monethe of May it byfelle a grete angre and vnhap / that stynted not til the floure of chynaly of alle the world was destroyed & slayn* (五月になると、人々の若々しい心は芽ばえ、花が咲く。なぜなら五月という時候は見るものすべて生々として、気持ちがいい。だから男も女も水々しい花を咲かす夏の訪れを心から待ち望むのだ。冬の間は寒い風が荒れ狂い、さしもの若々しい男女も引きこもって炉端にしがみついてしまふ。さて、この季節、すなわち五月に、こともあろうに大きな怒りと不幸がもちあがり、それは全世界の騎士道の華をすっかり亡ぼし尽くし、殺してしまふまでおさまらなかつた」といった、恋愛と騎士道が結び付いた言及が見られる。

(11) 後醍醐の寵愛を受けた阿野廉子が世の乱れの原因を作ったとする話や、高師直が塩冶高貞の北の方に横恋慕した結果、讒言をして高貞を陥れる話などがある。

(12) 強いて挙げるに、第六十九回「卜周易管輅知機 討漢賊五臣死節」内の「自古驕兵多致敗 從來輕敵少成功(古より驕兵は多く敗を致せり、從來敵を軽んじては功を成すこと少なし)」くらいである。

(13) これらの中には、「後人有詩單道赤兎馬曰」、「後人有詩歎玄德曰」といったように、具体的な対象が明記されることもある。また、「史官有詩曰」、「後人有古風一篇」など、若干形式が異なるものもいくつか確認できるが、こちらの形式については本稿ではその用例数にカウントしていない。

(14) 岩波文庫版『三国志』の訳注参照。

(15) 注(14)と同。

(16) 注(6)と同。

(17) 岩波文庫内、小川環樹氏の解説による。